

ひきこもり地域拠点型アウト・リーチ支援の可能性を問いつける

—ひきこもり経験値を活かす取り組みを通して—

○ NPO 法人レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク 氏名 田中 敦 (会員番号No.2891)

キーワード：ひきこもり経験値、サテライト事業、アウト・リーチ

1. 研究目的

多くのひきこもり家族会に参加する親のわが子は「外出することが困難で、他者との接触がままならない」という共通課題をもっている。そのため相談機関におけるインテークに結びつきにくく、家庭内でその対応を抱え込みやすい状況をつくりだしている。煮詰まった家庭環境に希望を見出す方法には家族会が果たしてきた機能は大きいものがあるが、その一方では「同様に悩む他人の悩みを聴くことで自分のところが押しつぶされそうになる」「終始愚痴の言い合いになってしまい一向にその先の進展が見えてこない」という声も聞かれることがあるし親の高齢化により相談機関等に足を向けられない事例も増えてきた。

ひきこもり支援における本当の意味での正念場は、彼らを支える親が高年齢化し生活の不安にさらされやすい 40 歳を超える年代層である。ひきこもりの定義にはしかるべき年齢区分がないはずなのに、これまでの支援のおもむきはとかく若年層が中心であり、高年齢ひきこもり者への支援は置き去りになりがちであった。ある関係者からは「高年齢になると一般就労が難しくなる」と聞かされたことがあるが、こうした「支援のしやすさ」によって判断がなされているとするならば当事者の思いはいかばかりのものだろうか。

また、「青年」は 20 世紀の言葉で「若者」は 21 世紀の言葉だと言われてきたが、子ども・若者育成支援推進法を「青少年健全育成基本法」に改正する法案が検討されている。

本実践研究の目的は、①北海道が他の都府県とは異なる広域性を有する地域であり、その特性を理解した取り組みが必要であることを明らかにする。②ひきこもり支援におけるアウト・リーチのあり方について考察する。③その実践活動の礎となる、同じ苦労を経験してきたピアな視点が織りなす力から今日の専門職の動向について検討を加えたい。

2. 研究の視点および方法

私たち NPO は過去にひきこもった経験者中心で組織する北海道唯一の当事者団体である。ひきこもり当事者の思いを重視した研究に立って質問紙アンケート調査並びに参加観察法に基づくグループ・インタビュー方法を用いて実施した平成 24 年度並びに平成 25 年度独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成金事業に基づく。本調査は北海道の広域性を考慮し、平成 24 年度は道内 12 カ所で調査を行ない、また平成 25 年度は政令指定都市札幌市と北海道第二の中核都市旭川市を重点地区として選定、調査を実施して考察を行なった。

3. 倫理的配慮

本調査にあたっては、調査用紙の文言は調査対象者の人権を侵害することのないよう配慮して作成するようつとめた。また質問紙アンケート調査並びにグループ・インタビュー調査については参加者に対して調査員が事業開始前に本調査の趣旨を十分説明し、回答者個人のプライバシーや人権が損なわれないよう配慮することを伝え同意をえた。また本調査で集約された情報は、許可なく使用しないことで理解をえた。さらに掲載した個別事例等について事前に当事者と家族に見てもらい許可をもらった。

4. 研究結果

平成24年度調査結果（n=106）では、当事者団体である私たちNPOに期待するものとして「情報提供」「居場所支援」「中間的就労」が上位を占めた。ここで示される「情報提供」を適切に社会的不利な当事者に伝え、地域で安心できる「居場所支援」を促進し、緩やかに自分の思いで社会参加できる「中間的就労」を創設していくためには「ひきこもり地域拠点型アウト・リーチ支援」が求められると考察し、平成25年度調査（n=85）では大都市と地方都市との比較検討を加える意味で札幌市と旭川市で各計5回の地域にアプローチする「サテライト事業」を実施した。

その結果、参加者のほとんどが家族、兄弟姉妹も平成25年度調査で3.4%と増加傾向であり、ロバート・M. サンレイが述べる「ひきこもりがちな家族が親切な地域住民等の誘いを受け、コミュニティ・センターのミーティングに参加することで、日頃打ち明けられなっていた悩みをソーシャルワーカーに表出することができた事例」にみるように、地域が働きかける「広義のアウト・リーチ支援」の可能性を改めて明らかにすることができた。

また、ひきこもり支援における個別訪問支援（狭義のアウト・リーチ支援）のニーズがあっても安心して一步を踏み出せない回答者が多くなかで平成25年度には3ケースについて個別訪問支援につながる結果を生んだ。「サテライト事業」に参加し学習した家族が家庭内での当事者への接し方などを変えたことが大きく影響を及ぼし、当事者からは「家庭内の空気が変わり、それまであった親子の焦り感情が落ち着いた」などの感想が出された。

5. 考察

私たちNPOはソーシャルワーク実践体系のメゾ・レベルからマイクロ・レベルに接近し、さらにマクロ・レベルを目指す活動に着眼してきた。その実践活動を支える要は苦勞を分かち合ってきたひきこもり経験者であり、「彼ら一人ひとりが活躍できる場面が地域に創り出されなければ本来の安心は届けられない」と考え、その実践活動を続けている。

彼らの持っている能力は実に多彩であり、その貴重な「ひきこもり経験値」を活かす場面を実践者は協同して取り組む必要がある。当事者運動は今日、「協働する仲間」へとシフトしている。決して「専門性はいらぬ」あるいは、「ピアはいたらぬ」ということを意味しない。人生の旅としてリカバリーしてきたピアが織りなす力を通してもう一度「今日の専門性を問い直すこと」を意味する。そこには専門職として「誰のための、何のための支援なのか」を問い続ける謙虚な姿勢が求められている。